

きゅうり

褐斑病、炭疽病

発生の動向

1 褐斑病

- (1) 令和5年の発生圃場率は61.5%（平年45.2%）で平年よりやや高く、発生程度中以上の圃場率は44.2%（平年24.1%）で平年より高かった（図1）。
- (2) 令和5年は秋期に広く発生がみられたことから、伝染源量は多いと考えられる（図2）。
- (3) 例年、7月下旬から発生が増加し、降雨が多いと発生量が増加する（図2）。
- (4) 令和2年以降、多発傾向が続いている（図1）。

2 炭疽病

- (1) 令和5年の発生圃場率は84.6%（平年60.3%）で、平年より高かった（図3）。
- (2) 令和5年の秋期に広く発生がみられたことから、伝染源量は多いと考えられる（図4）。
- (3) 例年、7月上中旬から発生が増加し、降雨が続くと急激にまん延する（図4）。
- (4) 令和2年以降、多発傾向が続いている（図3）。

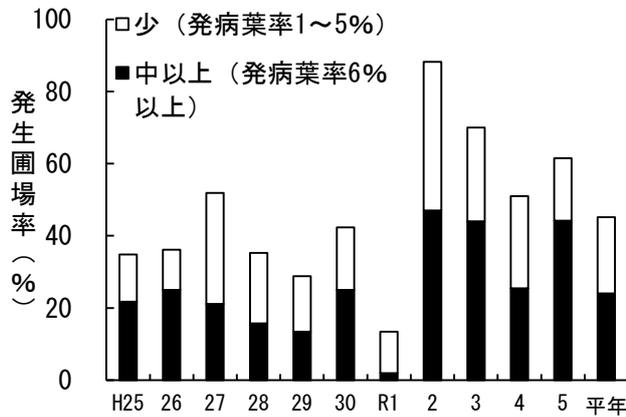


図1 褐斑病の発生圃場率の年次推移 (年間評価)

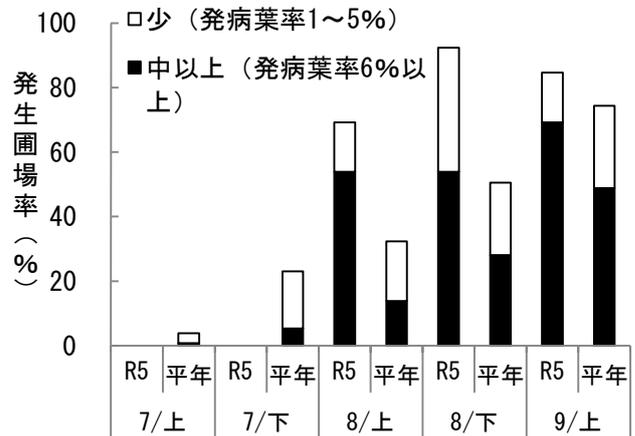


図2 褐斑病の時期別発生圃場率

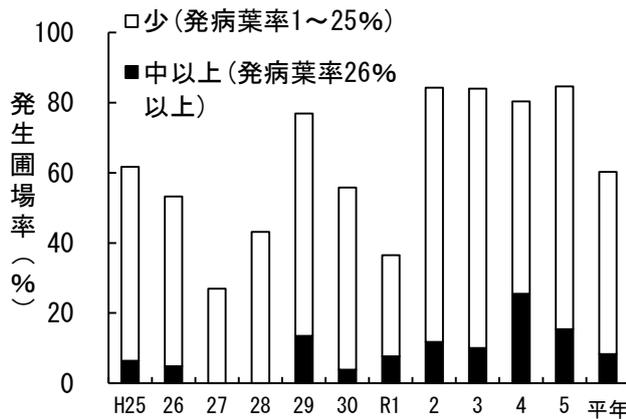


図3 炭疽病の発生圃場率の年次推移 (年間評価)

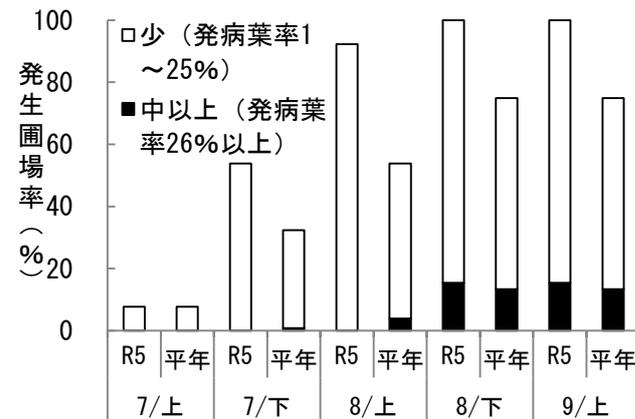


図4 炭疽病の時期別発生圃場率

防除対策

1 褐斑病、炭疽病共通

- (1) 罹病したつる等が伝染源となるため、前年のキュウリネットは使用しない。前年の発病圃場で使用した支柱等の資材は、使用前に、付着している残さを除去し、消毒する。
- (2) 被害残さは定植までに圃場から除去し、圃場衛生に努める。
- (3) 発病後は降雨のつど急速にまん延が進むため、予防を基本とし、本病に対して効果が高い薬剤を用いた定期的な防除を行う。
- (4) 感染拡大を抑制するため、初期の発病葉（図5、6）は、誤診をおそれず、早期に、積極的に摘葉する。特に炭疽病では、発病葉を残すと、病斑部から多量の胞子が落下し、発病葉直下では生長点や新展開葉で発病して早期枯れ上がりの原因となる。
- (5) 発病葉の摘葉後、ただちに効果の優れる薬剤を十分量、アーチ両側から丁寧に散布する。
- (6) 8月下旬以降は新葉の展開が少なくなり、発病は枯れ上がりに繋がるため、有効な薬剤により定期的な防除を行う。
- (7) 耐性菌の出現が懸念されるので、同系統の薬剤は連用しない。
- (8) 窒素過多、肥料切れは発生を助長するので、適正施肥に努める。また、過繁茂、なり疲れも発生を助長するので、摘葉や整枝、収穫等の作業が遅れないように努め、草勢を維持する。



図5 褐斑病の初期病斑



図6 炭疽病の初期病斑

※ 両病害の初期病斑は類似しているため、発病を確認したら病害の種類に関わらず、初期の発病葉を摘んだ後、直ちに薬剤散布を実施する。